

家族アイデンティティと看護

岡安 誠子

概 要

我が国は世界に例をみない速さで高齢社会を迎え、今なお高齢化は進行し続けている。急速な社会状況の変化に伴い、家族の有り様も変容してきた。本稿では、家族アイデンティティという概念から看護の対象となる家族を捉えることの意義を検討した。家族アイデンティティという概念は、集団としての規模の同定、相互性などの家族機能や家族の適応変化において、家族を看護の対象である個人と集団として深く分析する上で一つの視座を提供すると考えられた。

キーワード：家族, 変化, アイデンティティ, 看護

I. はじめに

1. 概念導入の意義

多くの場合、人の内的世界には、その人が経験してきた家族を通しての「家族」という心象が存在する。社会学者である上野(1994)は著作「近代家族の成立と終焉」の中で、おそらく我が国で初めてFamily Identityについて記し、「ファミリー・アイデンティティとは文字どおり何を家族と同定identifyするかという『境界の定義』である」としている。上野はまた、この概念の導入の意義を「第一に家族が実態的な自然性を失って、何がしか人為的な構成物と考えられるようになってきたこと。第二にこれまで伝統的に家族の『実態』と見なされてきたものとファミリー・アイデンティティとの間に乖離が見られるようになってきたこと。第三にファミリー・アイデンティティもまた個々のファミリー・メンバーによって担われる他ないが、ファミリー・アイデンティティの概念は複眼化することによって、家族メンバー相互の間のズレを記述することができる」と同著で述べている。この上野が述べる家族アイデンティティと

いう概念は、看護学において考えるときにも、大きく2つ場面でひとつの視点を与えてくれると考える。1つには、多様化する家族を“集団”の範囲として同定するとき、2つには家族構成員“個人”が抱く心象としての家族を捉えるときである。

2. 現代家族の背景

平成26年度版高齢社会白書(内閣府, 2014)によると、我が国の総人口は平成23(2011)年から3年連続で減少し、平成25(2013)年10月には1億2,730万人となっている。その内、65歳以上の高齢者人口は3,190万人であり、総人口に占める割合は25.1%に達している。高齢化率が7%から14%に達するまでの所要年数(倍化年数)は、先進諸国は40～130年であるのに対し、わが国は24年で前例のない速度に進んできた。今後も更なる高齢化が進むとされており、将来推計人口から「9,000万人を割り込む総人口」、「2.5人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳以上」と50年後の諸問題が提示されている(内閣府, 2014)。この急速な高齢化に加え、わが国では戦後以降の社会における思想の変化や高度経済成長以降の経済構造の変化も伴って、地

方から都市部へ人口の流出と流入は続いている。

このような社会の変化は、社会的現象として大家族の解体と核家族化を促進し、わが国における家族に大きな変化をもたらした。この生活単位としての家族の狭小化は、高齢者の介護や子どもの育児など、広く現在の社会の課題へとつながり、人々の生活に影響を与えている。

3. 本稿の目的と構成

本稿では、急速に多様化が進む家族を看護の対象として捉え、家族の課題に関連して起こり得る事象の同定に資するため、Family Identity (以後、家族アイデンティティ) の概念を用い、看護の対象者である家族、そしてその実体である個人と集団について再考したいと考える。

まず初めに、家族アイデンティティに関連する主要な学問分野の先行文献を基に、家族アイデンティティの概念そのものについて分析を行う。次に、アイデンティティそのものが有する特性からその機能や意義について検討する。そして、家族看護学における変化理論などとの関連性について検討を経て、家族アイデンティティという概念が看護に与える意義について筆者の考えを述べたい。

II. 用語の説明

本稿では、家族アイデンティティについて、上野(1994)のようにファミリー・アイデンティティと表記したものと、林ら(2003)の用いた家族アイデンティティの表記を引用箇所そのまま用いている。両者の英語表記は何れも Family Identity であり、両研究者の示した定義は異なるが相反するものではなく、意図的に定義を分けたものでもない。よって、本稿では基本的に両者を同義と捉え、家族アイデンティティと表記する。

また次章以降で、度々“実存的な世界”という表現を用いている。これは、個人の内的な心象世界と区別するための表現として用いており、通常人々が無意識的に共有し承認する世界(社会)を現している。

III. 家族アイデンティティと周辺概念

家族アイデンティティについて、アイデンティティの提唱者である Erikson のパーソナル・アイデンティティと自我アイデンティティから集団アイデンティティに至るまで、まずは個人と集団の見地から家族アイデンティティの周辺概念について文献から検討する。

1. 自我アイデンティティとパーソナル・アイデンティティ

一般に家族は、少なくとも2人以上の個人の集合として存在する。故に、上野(1994)もファミリー・アイデンティティもまた個々のファミリー・メンバーによって担われる他ないと述べた。このことから、家族アイデンティティはパーソナル・アイデンティティあるいは自我アイデンティティといった個人レベルの意識から派生したものと言える。

パーソナル・アイデンティティ

パーソナル・アイデンティティについて Erikson (1959) は、パーソナル・アイデンティティをもっているという意識的な感覚は、2つの同時的な観察に基づいている。時間一空間における自分の斉一性と連続性の感覚、および他者が自分の斉一性と連続性を認識=承認しているという事実の知覚としている。

自我アイデンティティ

自我アイデンティティについて Erikson (1959) は、存在の単なる事実以上のもので、その人の個性のスタイルである自我総合の方法にそれ自体の斉一性と連続性があるという自覚と、他者に対する自分の斉一性と連続性とに合致しているということの自覚であると述べている。

パーソナル・アイデンティティと自我アイデンティティは同義と説明されているものもあるが、上記の定義を比較するにパーソナル・アイデンティティは「他者との差別化による存在の知覚」であるのに対し、自我アイデンティティは「他者との関係性における存在の自覚」と弁

別できよう。

したがって、家族を対象とした場合に問題となってくるのは、相互の関係性といった力動性を内包した自我アイデンティティとすることができる。また、自我アイデンティティを「他者との関係性における存在の自覚」とすると、個人を取り巻く人的環境(集団)がアイデンティティ理論の基盤としてあることは自明のことである。実際、植松(2009)はアイデンティティにおける自我アイデンティティと集団アイデンティティの相互形成に着目し、Eriksonの理論から次のように説明している。「Freud, S. が構造論(topography)において提唱した心的装置(psychic apparatus)のうち、特に自我に焦点を当て、個人の精神内の秩序を維持しようとする適応的な力を積極的に捉えようとしている。そして、Freud, S.の心理学的な(psycho-social)心の発達理論を、社会・文化・時代と関わりながら発展していく心理社会的な(psycho-social)発達理論として発展させた(e.g., 個体発達分化図式epigenetic chart)(Erikson, 1968)。アイデンティティの概念は、この自我機能にもとづいており、Eriksonの理論の中心的なものとなっている。」つまり、アイデンティティは、個人を取り巻く人的環境(集団)がアイデンティティ理論の基盤として、内的世界と外的世界を結びつける精神の調整機能にとりてなくてはならないものと言える。

2. 集団アイデンティティ

集団には、一般に2つの意味がある。一つは数の集合としての意味、もう一つは特定の機能を伴った集合としての意味である。実存的な世界において人とそれを取り巻く環境はひとつとして変わらぬものはなく、常に移ろい変化している。人的環境についても例外ではない。Erikson(1968)は、アイデンティティについて考察する際、個人の成長とコミュニティの変化とを切り離すことはできないと述べ、集団アイデンティティの概念は自我アイデンティティの理論とともに発展してきた。そのため、集団アイデンティティと自我アイデンティティは相互補完作用を持ち(植松, 2009)、相互形成についての理論であり、自我とコミュニティあ

るいは個人と社会の関係性を捉える理論(河井, 2013)ともいわれている。この集団アイデンティティは、1970年頃より主として海外の社会心理学分野において、マイノリティ研究の中の民族アイデンティティとして議論されてきた(Hofman,1970; Masuda et al,1970)。Phinney et al(2007)は、Marcia(1966)によるアイデンティティ・ステータスの研究を基に、自己の民族性の「exploration(探索)」と自己の民族性への「commitment(専心)」を、民族アイデンティティ発達の構成共通要因としている。これは、民族アイデンティティのみならず、人が形成する社会集団における凝集性を維持する上でも重要な概念と考える。無論、ここで言う社会集団に家族も含まれる。また、植松(2009)は、日本人の交換留学生を対象とした縦断調査において、異文化において民族アイデンティティは顕在化されることを指摘している。このことは、実存的な世界における社会的事実の変化によってアイデンティティの顕在化が引き起こされることを示している。それはつまり、家族そのものや家族を取り巻く状況の変化が家族アイデンティティに何らかの作用をもたらして顕在化させ、家族構成員に意識的あるいは無意識的な「家族とは何か?」という模索を促すことの可能性を示している。

IV. 家族アイデンティティ

Bennett et al(1988)はFamily identityについて、「家族アイデンティティとは、時間を越え続く家族の主観的意識(sense)であり、現状であり、特性である」と述べている。国内では、本稿の冒頭にも述べたが上野(1994)がファミリー・アイデンティティを「文字どおり何を家族と同定identifyするかという『境界の定義』」と述べている。また、家族アイデンティティは、林と岡本(2003)によって「自分は家族の一員であるという感覚が、斉一性と連続性を持って自分自身の中に存在し、また、それが他の家族成員にも承認されているという認識」とも定義され、主として青年心理研究分野を中心として研究されている。上野と林らの定義を比較すると、上野は前述のパーソナル・アイデンティ

ティに近い他集団との境界として定義しているのに対し、林らは自我アイデンティティに近く、より家族の関係性、或いは機能性というべきものに着目した定義となっている。

先述した集団アイデンティティに関する緒論から家族アイデンティティを考察するに、家族アイデンティティは広義の集団アイデンティティに内含されている。集団アイデンティティは、家族アイデンティティをはじめ、民族アイデンティティ、国民アイデンティティなど社会における様々な帰属意識と必然的に並存する。広義の集団アイデンティティは、集団に関わる各アイデンティティより上位にある概念と言えるだろう。広義の集団アイデンティティは、広く人々の集合と関連性を表す言葉であることから、集団に関わる全てのアイデンティティを内含する性質を有する。一方、狭義の集団アイデンティティとして、集団に関わる全てのアイデンティティに共通する抽象化された集団アイデンティティということができる。

広義の集団アイデンティティは、個人の中で自我アイデンティティとの相互性を持ち、家族アイデンティティと自我アイデンティティにもまた相互性があることを示す。人は日常的に「集団アイデンティティとは何か？」と意識することはなく、「自分にとって家族とは何か？」あるいは「自分にとって国とは何か？」といったより具象化された問いとして意識化されることが殆どであろう。個人のアイデンティティの中には社会的事実を取り込み解釈するために多くの枠組みがあり、それらの枠組みは意識的あるいは無意識的に結び付けられ意味づけられつつ相互性をもって共存している。

先に、社会的事実の変化によってアイデンティティの顕在化が引き起こされる可能性について、また民族アイデンティティ発達の構成共通要素として、Phinney et al (2007) の「exploration (探索)」と「commitment (専心)」についても述べた。家族にかかわる事実の変化は、「家族とは何か？」といった問いを顕在化させ、家族の変化に対応しようと「家族に専心」する家族構成員の家族アイデンティティと自我アイデンティティに何らかの影響を与えることが推察できる。

V. アイデンティティの特性

1. アイデンティティの生涯発達

Erikson (1959) は、「青年期の終わりが、はっきりしたアイデンティティの危機の段階であるからとって、アイデンティティ形成そのものは、青年期に始まるわけでも終わるわけでもなく、個人や社会にとって、その大半が意識されることなく生涯つづく発達過程」としている。このことを言い換えれば、自我アイデンティティあるいは家族アイデンティティというのは生涯における内的小よび外的な文脈のなかで、絶えず斉一性と連続性を保ちつつ変容していくということを表しているものと言える。

2. アイデンティティと適応

植松 (2009) は、アイデンティティについて、自分の内的な秩序を維持しようとする自我の調整機能と述べ、そこで獲得されたアイデンティティは集団アイデンティティと関連する自我アイデンティティの感覚に置き換えることが可能だと述べている。それはつまり自我アイデンティティと集団アイデンティティとは社会的事実の変化を反映しながら絶えず変容していることを表している。また、それはアイデンティティの本質的な特性とも言えるだろう。故に、当事者にとって社会的事実となる何らかのライフ・イベントが生じた場合、そのライフ・イベントに関わるアイデンティティと共に自我アイデンティティは変化を促され大きく揺らぐことになる。家族で最も衝撃的なライフ・イベントとしては、配偶者の死などが知られている (石原ら, 2008)。植松 (2009) は、Erikson の理論は、Freud の理論のうち特に自我に焦点を当て、個人の精神内の秩序を維持しようとする適応的な力を積極的に捉えようとしていると述べている。このことから、Erikson の提唱したアイデンティティは、絶えず変化する実存的な世界の社会的事実の変化に対して、取り分け個人の内的秩序を維持するために機能し、人々が状況変化に適応していく上で欠くことのできない精神機能といえる。

しかしながら、適応ということを論ずる時、

過剰適応の問題に留意しなければならない。過剰適応とは、他者からは「適応している」と見なされているものの、本人には「適応している」感覚はない状況をいう(浅井, 2012)。つまり、行動レベルでは適応を示していながら、アイデンティティのレベルでは内的秩序が乱れを生じたままで失調をきたしている状況である。しかたがって、対人支援に従事する者は、適応が行動のみでは推し測り難いことに留意する必要があるだろう。

3. アイデンティティと健康

これまで述べてきたように、実存的な世界において社会的事実はずえず変化して、それに伴い我々のアイデンティティもまた常に変化することを促されている。山本(1984)は、バイカルチュラルな生育歴を持つ青年が自分の存在が根付くところを求めて迷走した例を挙げ、そこにアイデンティティの問題があることを指摘している。植松(2009)は、このことをErikson(1964)の「根こぎ感(up-rootedness)」との関連において説明を試み、人は「それまでに馴染みのあった社会集団から切り離され自分の『根』を失うと、自我機能や『自己アイデンティティ』の感覚を弱め、拠り所の無い不安感を引き起こし、ひどい場合には精神疾患につながる可能性がある」と述べ、精神的健康における自己アイデンティティと集団アイデンティティの関連性と重要性を指摘している。

民族アイデンティティ発達の構成要素を示したPhinney et al(2007)は、民族への「専心(commitment)」について、以前には「愛着・所属感(affirmation/belonging)(Phinney, 1992)」と表した。このことも示すように、所属集団に対する「専心(commitment)」は、言い換えれば所属集団に対する愛着や所属感といえるだろう。これらは、個人や集団の内的秩序を維持していく上でも欠かせない要素と言えそうである。

VII. 家族看護学と 家族アイデンティティ

家族にとって家族構成員の健康の破綻は、対象者の生活や人生に大きな影響をもたらすのみ

ならず、同時に周囲の家族の生活や人生にも多大なる影響を与える。対象者を取り巻く現実の変化は、対象である個人がそれまで抱えてきた信念と現実との間に相違をもたらす。このような家族の課題に向けた支援として家族看護学は発展してきた。家族看護学における変化理論として、家族が慣れ親しんだ現状を維持しようとする力(安定)と、新しく変化しようとする力の間で揺れ動くこと、そして、変化の連続性(森山, 2001)」について議論がなされている。この変化によって揺れ動く様は、これまでに述べてきた家族アイデンティティおよび自我アイデンティティ理論に通じるものである。また、家族看護学における変化の連続性に関する議論では、研究者によって見解が分かるとされているが(森山, 2001)、アイデンティティの見地から言えば、どれほど大きな変化が内的に起ころうとも、個人から派生するところの家族の在り様もまた連続性をもって理解されるべきものと言えよう。

このように、家族看護学で議論される家族の変化に伴う“動揺(ゆらぎ)”は、個々の心象、つまりアイデンティティとしての家族、そして実体としての家族の変容といった内的かつ外的な変化から説明することができると思われる。

VII. 看護への示唆

前章まで、家族アイデンティティとその周辺概念、健康におけるアイデンティティの意義などについて検討してきた。

歴史的にみても、家族という集団は人々の健康な生活を維持する上で重要な役割を果たしてきた。虐待など顕在的・潜在的な家族内の諸問題を抱えながらも、現代社会もまた、家族によって人々の心身の健康を支えていくことを基本的に求めている状況は変わらない。また、このような家族機能は、大衆によって支持される家族の姿とも言えるだろう。一方、現代の狭小化した家族は、家族としての恒常性に対する予備力を弱めているように見受けられる。故に、社会要請によって生じる歪みも表れやすくなるだろう。実際、筆者自身も健康障害を抱え、家族の介護に限界性を感じながらも、心象として

の家族から離れきれず苦しみ悩む介護者を目にしてきた。このような心象の家族像と現実とのギャップは、一家族員の健康障害といった実存的世界の変化との折り合いの中で表在化してくることを予測することができる。

現在、家族の社会的な背景として、核家族化の増加があることは冒頭に述べた。近年では、更に高齢化と共に単身世帯も増えている（内閣府, 2004）。つまり、高齢者世帯にかかわらず実体として一世帯として同居することなく存在する家族が今後も増加を続けることが予測される。このことを家族アイデンティティと看護との関連性から捉えると、上野（1994）の言う境界の定義は、多様化する現代家族、特にその範囲（サイズ）を同定する上で重要となる。また、看護においては疾病などによる家族成員の健康に関連した変調や出産といった新たな家族成員の迎え入れといった事実の変化に対する家族の反応に焦点を当てることも多い。社会の変化に伴い変わりゆく家族のあり様を、家族機能として捉えるときには、居住を同じくして現実的かつ手段的な相互支援をなす集団から、世帯としては単独化し家族への帰属意識を中心とした精神的支柱としての家族へと今後は機能が移行していくことも考えられる。

これからの看護において、変容し多様化する家族のあり様を家族アイデンティティの視点で捉え、家族を家族成員の心象としての家族、つまり家族アイデンティティから捉えることは、その規模や相互性といった家族機能、また家族の適応変化について分析を深めるためにも重要と言えるだろう。

文 献

浅井継悟（2012）：日本における過剰適応研究の研究動向，東北大学大学院教育学研究科研究年報，60（2），283-294.

Bennett, L.A., Wolin, S.J., & McAvity, K.J. (1988) : Family Identity, Ritual, and Myth: A Cultural Perspective on Life Cycle Transitions. / Falicov, C.J. (Ed.) (1988) . FAMILY TRANSITIONS: Continuity and

Change over the Life Cycle, 212, THE GUILFORD PRESS, New York.

Erikson E.H. (1959) : PSYCHOLOGICAL ISSUE IDENTITY AND THE LIFE CYCLE, International University Press / 小此木啓吾 (1973) : 自我同一性 - アイデンティティとライフ・サイクル, 10・122, 誠信書房, 東京.

Erikson E.H. (1964) : Insight and responsibility, New York: Norton.

Erikson E.H. (1968) . Identity : Youth and Crisis,

W. W. Norton & Co., Inc / 岩瀬康理(1982) : アイデンティティ, 金沢文庫, 東京.

Hofman JE. (1970) : The meaning of being a Jew in Israel: an analysis of ethnic identity. Journal of Personality and Social Psychology., 15 (3) , 196-202.

石原邦雄 (2008) : 改訂版 家族のストレスとサポート, 46, 財団法人 放送大学教育振興会, 東京.

河井亨 (2013) : E.H. Erikson のアイデンティティ理論と社会理論についての考察, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 59, 639-651.

林奈那, 岡本祐子 (2003) : 青年の家族行事が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響, 青年心理学研究, 15, 17-31.

林奈那, 岡本祐子 (2005) : 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達の関連, 家族心理学研究, 19 (1), 13-29.

内閣府 (2014) : 平成26年度版高齢社会白書, 2015-09-02,

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf_index.html

Marcia, J.E. (1966) : Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3 (5) ,551-558.

Masuda M, Matsumoto GH, & Meredith GM. (1970) : Ethnic identity in three generations of Japanese Americans, The Journal of Social Psychology. 81 (2) , 199-207.

- 森山美智子 (2001) : ファミリーナーシングプラ
クティス 家族看護の理論と実践 (第6版),
35-36, 医学書院, 東京.
- 著者名 (西暦発行年) : 書名 (版数), 引用箇所
の初頁 - 終頁, 出版社名, 発行地.
- Phinney, J. (1992) : The Multigroup Ethnic
Identity Measure : A new scale for
Use With Diverse Group, Journal of
Adolescent Research, 7, 156-176.
- Phinney, J. & Ong, A. (2007) :
Conceptualization and Measurement
of Ethnic Identity: Current Status and
Future Directions, Journal of Counseling
Psychology, 54, 271-281.
- 植松晃子 (2009) : 異文化における心理的サポ
ートについての論理的考察 - 新たなパラダイ
ムの提案, 人間文化創成科学論叢, 11, 175-
182.
- 上野千鶴子 (1994) : 近代家族の成立と終焉, 5-6
岩波書店, 東京.
- 山本力 (1984) : アイデンティティ理論との対話:
Erikson における同一性概念の展望 / 鏑幹
八郎, 山本力, 宮下一博 (編), アイデンティ
ティ研究の展望 I, ナカニシヤ出版, 京都.

岡安 誠子

Family Identity and Nursing

Masako OKAYASU-KIMURA

Key Words and Phrases : family, transition, identity, nursing